

## ペテロ第一4章7節 「終わりに備える」

### 1A 終わりの時

1B 国々と天の揺らぎ

2B 楽しみの除去

3B 地の悪の増大

### 2A 心の整え

1B 整えられる花嫁

1C 福音宣教

2C 教会の建て上げ

3C 清め

2B 霊的な素面

1C 放蕩や思い煩い

2C 光の中

### 3A 祈り

1B 聖徒たちのための祈り

2B 聖徒たちの正しい訴え

## 本文

ペテロの第一の手紙4章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが先週、3章まで来ましたが、本日は午後に4章を一節ずつ学んでいきます。今朝は、7節に注目します。「**万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。**」

### 1A 終わりの時

私たちは、このようにして聖書を順番に、一節ずつ読み進めて行っています。そこで分かって来ることは、聖書は、旧約時代の預言者たち、新約時代の使徒たち、そして、要石であられるイエス・キリストご自身が、終わりの日を強調しているということです。それに対して、聖書にある真理を土台にしているはずの教会がしっかりと教えない傾向にあります。それは、一部に極端になっている人々がいるからです。しかし問題は、その一部の極端に反応して、一切触れない方がいいという苦手意識ができています。

もう一つ、歴史的な過ちがあります。キリスト教会はローマに迫害されていました。しかし、ローマの皇帝がかえって信仰を持ち、ローマ帝国自体がキリスト教を国教にしたのです。その時以来、あたかも神の国がすでに地上に実現したかのように考えたことです。終わりがすでに来た、だからそれ以上、再臨を求める必要はないという考えが、間違っているのはわかっている、実質、その

ように受け止めていることです。そのために、聖書が一貫して示している、終わりの日が近いという信仰が、何か、初代教会だけのものになってしまっています。

しかし、聖書を神のことばとして信じている私たちは、今が終わりの時なのだという信仰を回復させなければいけません。それは、どの時代に生きているキリスト者も、今が終わりの時のだと信じて生活しなければいけないということです。

今朝は、そのための心備えについて学びます。グレッグ・ローリーという伝道者がアメリカにいます。映画「ジーザス・レボリューション」の主人公です。「聖書預言の終わりの日についての知識は、私たちが怖がらせるためにあるのではない。備えるためにあるのだ。」そうです、私たち日本に住む者たちは、地震のことを思えばすぐに分かります。気象庁は、大地震が来るかもしれないという予想を立てています。そして、地方自治体や政府も、それに備えた対策をしっかりと立てています。そして我々、一般市民もその備えをします。怖がらせるために、気象庁は予想を立てていません。備えるためです。主は、ご自分の民に対しても、怖がらせるのではなく備えるために、前もって私たちに、終わりのことを初めから伝えてくださっているのです。

## 1B 国々と天の揺らぎ

まず、「万物の終わり」とは何か？これは、ペテロが第二の手紙で詳しく話していますが、「今の天と地が過ぎ去る」ということです。「3:10 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。」ペテロがこのようにいうのは、主ご自身が、ご自分が戻ってこられる前に、そのようになると教えておられたからです。「ルカ 21:25-27 それから、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では海と波が荒れどよめいて、諸国の民が不安に陥って苦悩します。人々は、この世界に起ころうとしていることを予測して、恐ろしさのあまり気を失います。天のもろもろの力が揺り動かされるからです。そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」そして、主ご自身はとりもなおさず、歴代の預言者たちが語っていたことを、ご自分の到来に合わせて語っておられるにしか過ぎません。今、イザヤの預言を平日の学びで読んでいますが、例えば先週見た24章は、地のすべての面がくつがえされて、地を荒れ果てるようにするとあります。

このように、天変地異が起こることを主は語られますが、国々が政治的に、経済的にも揺れ動くことを、預言者ハガイは語っています。「2:21-22 わたしは天と地を揺り動かし、もろもろの王国の王座を倒し、異邦の民の王国の力を滅ぼし尽くし、戦車とその乗り手をくつがえす。」今、世界の様々なところで、国々が揺り動かされています。戦いが起こっています。そのことと、異常気象や、様々な天災が起こっていることは、偶然の一致ではありません。主が、ご自身が主権者として来られるにあたって、ご自身こそが神であり王であることを示すために、国々も、天地も揺り動かされているのです。政治的な異変と、自然界の異変は同期しているのです。

なぜ、そんなことを主はなされるのか？再び、平日の学びのイザヤ書を振り返りますと、そのテーマは、「主こそが救い」というものです。主ご自身こそが救いで、他に救いはないのに、人々は、安定しているところでは、神を必要としないと満足しているからです。それで、その支えとしているものが支えにならないことを、主は教えられます。それが、揺り動かしの理由です。何とかして、主ご自身に立ち返ってほしいと願われています。

## 2B 楽しみの除去

そして、主が天地を揺るがすことを語られているところで、しばしば、この世における楽しみを取り除くことを預言されています。先週の平日の学び、イザヤ書 24 章にも書いてありました(8-11 節)。主も、弟子たちに、ご自分の来られる日について、陽気さや楽しみが取り除かれることを語られました。「ルカ 17:26-29 ちょうど、ノアの日が起こったのと同じことが、人の子の日にも起こります。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていましたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。また、ロトの日が起こったことと同じようになります。人々は食べたり飲んだり、売ったり買ったり、植えたり建てたりしていましたが、ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降って来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。」

世の悪が増大しているのに、日ごろの生活があるから、それに無感覚になっているのが、世の姿です。罪に対して悲しみを覚える時、その人は幸いであることをイエス様は語られました。神のみこころにかなった悲しみは、悔いの残さない救いをもたらします。悲しんでも、慰められるのです。これが大きな違いです。世にある楽しみが取り除かれる時に、罪に対する悲しみを知らない人は、すべてがなくなり、嘆き叫ぶだけです。「Ⅱコリ 7:10 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

## 3B 地の悪の増大

そして、主が天地を揺るがすのは、地上に悪が増大しているからだと言っています。イザヤ書には、「24:5 地はその住民の下で汚されている。彼らが律法を犯して定めを変え、永遠の契約を破ったからである。」とあるのです。ソドムについて、「創 13:13 ソドムの人々は邪悪で、主に対して甚だしく罪深い者たちであった。」とあります。主は、とても忍耐深い方です。アブラハムが執り成しをした時、正しい人が十人いたら、町全体を赦すと言われました。けれども、それは神が、罪を罰しないということでは全くないのです。多くの人が、罪を犯しても何も起こらないので、罪を是認していると思い込んでいます。主は恵み深い方ですが、罪に対して、必ず罰する方です。

## 2A 心の整え

### 1B 整えられる花嫁

そこで私たちは、心備えをしなさいと、ここで教えられているのです。「**心を整え身を慎みなさい**」と教えています。教会は、キリストの花嫁であることが聖書では教えられていますが、花嫁は花婿

の前に立つために身を整えますね。それと同じように、みことばによって洗い清められた私たちが、整え、天から来られた主の前に立つのです。(エペ 5:26-27 参照)

主は、戻ってこられます。初めに、天から降りて空中にまで来てくださり、私たち教会が引き上げられ、天に連れていってくださいます。そして、地上に、私たちと共に戻ってこられます。そして、この地上に神の国を建ててくださいます。その神の国の幻を、私たちは信仰によって先を見ます。その回復された姿を思い描いて、今の私たちがそこに向かって進むのです。主が地上に戻ってこられなければ、その完成は起こりません。回復はありません。世は悪くなる一方です。けれども、この地上に希望がなくなる、ということでは全くないのです。主に贖い出された者たちは、御霊によって、この地上においてますます光り輝くものとなり、御国が到来するのをお迎えするために、自分たちを整えるのです。

### 1C 福音宣教

終わりの日の幻には、世界中で、主の御名がほめたたえられている姿があります。「イザ 24:14-15 彼らは声をあげて喜び歌い、西の方から【主】の威光をたたえて叫ぶ。それゆえ、東の国々で【主】をあがめよ。西の島々で、イスラエルの神、【主】の御名を。」このことが起こるのは、終わりの日、主が戻ってこられる時なのですが、しかし、その時に向かって、世界で福音が宣べ伝えられることを求めるのです。イエス様が言われました、「マタ 24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」

世の終わりについて、聖書預言について熱心に学んでいる者であれば、同時に、多くの人に福音が宣べ伝えること、国や民族を超えて伝えられることを、強く願うはずで、そうならないければ、主のみこころにそって、聖書預言を読んでいないことでしょう。

### 2C 教会の建て上げ

そして、私たちは終わりの日に、主にあって一つにされることを知っています。「エペ 1:10 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」イエス様がご自身にあって一つにされることを、父なる神に願い求めている場面があります。ヨハ 17:21-22 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。」

キリストにあって一つにされていく、建て上げられていくことが、終わりの日について学ぶ時に、視野に入っているでしょうか？確かに、終わりの日には、背教が起こることが第二テサロニケ 2 章に書いてあります。畑に毒麦が蒔かれることが書いてあります。それで、終末預言を学んでいる

人々の中に、これが偽りの教えである、これがいけない、あれがいけないといって、自分たちだけが正しいことを信じていて、他のすべての教会は偽りなのだとする人々がいます。しかし、これこそが反キリストであると、ヨハネは第一の手紙で話しました。知識に頼って、受肉されたキリストに頼らないこと。人々の間に住まわれるキリストが、私たちの真ん中におられて、愛し合うところにごの方がおられることを信じません。イエスご自身に人格的に会っていないので、知識に頼るのです。終わりの日には、反キリストが大勢現れると、ヨハネは言いました。

確かに、背教は起こります。けれども、終わりの日には、キリストにあってすべてが集められ、一つにされている姿があるのです。それで、私たちは分裂しているところに、平和の架け橋をかける働きに召されているのです。平和を造る者は、神の子と呼ばれるという約束を、イエス様が語られました。キリストにあって、二つのものが一つになり、それで新しい、ひとりの人になると、パウロがエペソ2章で話しました。天において、あらゆる人々が、国や民族、言葉を超えて集められ、キリストの流された血によって、一つの神の民になっているのです。だからこそ、今、私たちは、互いに愛し合って、平和の絆で結ばれることに、情熱を費やす必要があります。

### 3C 清め

そして、終わりの日には、キリストにある者たちは清められます。キリストのように変えられます。ゆえに今、自分自身を清めるのです。「1ヨハ 3:2-3 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」

### 2B 霊的な素面

改めて、本文 7 節を見てください。「心を整え身を慎みなさい」と言っています。身を慎みなさいというのは、しらふでいることです。酔いしれているのではなく、思いが整えられていて、しっかりとしていることを意味しています。

### 1C 放蕩や思い煩い

世の終わりには、惑わしが多くなります。あらゆる欲望や誘惑に陥る危険があります。思い煩いが多くなります。イエス様が言われました。「ルカ 21:34 あなたがたの心が、放蕩や深酒や生活の思い煩いで押しつぶされていて、その日が罨のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい。」

それらの惑わしを、黙示録 18 章では「魔術」と呼んでいます。「18:23-24 ともしびの光も、おまえのうちで、もはや決して輝くことはない。花婿と花嫁の声も、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。というのは、おまえの商人たちが地上で権力を握り、おまえの魔術によってすべ

ての国々の民が惑わされ、この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出されたからである。」ローマには、コロッセウムという競技場の跡があります。キリスト者たちが、そこに投げ込まれ、生きている獅子に喰い殺されるのを、エンターテイメントとして人々が見ています。人々が楽しんでいる中で、そのような残虐なことが行われているのです。このような現実があるのに、まるで問題がないかのように楽しんでいる姿を「魔術に惑わされている」と言っています。見えるものが見えないで、別のものを見させられている状態です。

だから私たちは目を覚ましていなければならない。霊的に酔いしれないで、しらふでいる必要があるのです。イエス様の言葉にあるように、「放蕩や深酒や生活の思い煩い」があります。世の楽しみにふける人々は、主が戻ってこられたら、一切合切を失って嘆き悲しむこととなります。信仰者も、信仰が試されて、これらの楽しみにふける誘惑が、強くあります。もう一つ、思い煩いにも気を付けなさいといけません。これをしなければいけない、あれをしなければいけない。これをやったら、どうなるのだろうか？などなど、信仰によってまっすぐ歩むのではなく、思い煩いに押しつぶされていくのです。主が来られた時は、罨にかかったようになってしまいます。

## 2C 光の中

そこで、私たちは光の中にいるのです。テサロニケ第一 5 章で、パウロが勧めていました。「5:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みというかぶとをかぶり、身を慎んでいましょう。」光の中に生きるとは、信仰と愛の胸当てをつけることです。そして救いの望みを抱いていることです。

## 3A 祈り

そしてペテロは、心を整えて身を慎むことを、祈りの中で行うように勧めているのです。

### 1B 聖徒たちのための祈り

聖徒たちのための祈りが、いかに大切であるか、エペソ 6 章でパウロが教えています。「6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」祈りについて、重要なことを言っています。一つは、どんな時にも祈ることです。それには御霊の助けが必要です。私たちは、祈りを忘れるのが、自然なのです。どんな時にも祈るのは、肉に反します。御霊の助けが与えられて、どんな時にも祈ります。もう一つは、目を覚ましているのです。これが今、話したことです。世の終わりには、惑わしが多くなります。あたかも眠っているかのように、周りのことが見えなくなります。聖徒たちのために祈るのではなく、他の思い煩いで罨にかかっています。そして、目を覚ましている中で、聖徒たちのために忍耐を持って祈ります。忍耐しないと祈れません。祈りへの答えが見えないことが多々あります。けれども信仰をもって祈ります。

## 2B 聖徒たちの正しい訴え

そして、私たちは、世における不正を見て、主に対する訴えを祈ります。イエス様は、あきらめないで祈ることを教えるために、不正の裁判官のたとえを語られました。不正の裁判官でさえ、やもめの訴えがうるさくて、裁いたのであるから、ましてや、聖徒たちの訴えを聞かないことはないことを、語られました。「ルカ 18:7-8 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

最後のところが、大きな警告です。主は、必ず正しい訴えを聞いてくださいます。けれども、ついに人の子が現れる時に、どれだけ信仰をもって祈っているのか、その信仰がどこまで見られるのか？と問いかけておられるのです。ですから、ここで心備えていない人が大勢いるということです。身を慎んでおらず、眠ったようになって、惑わされてしまっている人が多いということです。また、放蕩や深酒、思い煩いに押し潰されてしまっている人々が多いということです。祈りと共に、私たちが、万物の終わりが近いことを思っていましょう。